

えの教頭

三重県公立小中学校教頭会
 〒514-0003 津市桜橋2丁目142
 教育文化会館別館3階
 TEL 059 (228) 2340
 FAX 059 (228) 2271
 E-mail:mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

重 点 取 組

(単位教頭会より)

お互いを支え合い高め合える関係を大切に

桑名市・桑名郡教頭会 桑名市立日進小学校 上 田 眞 人

桑名市・桑名郡教頭会は、中学校11校、小学校29校（分校含む）で構成されています。

教頭研修会は、各々の教育委員会の理解を得ながら、年間9回開催しています。全体での報告、研修、協議、連絡等を行った後、小学校部、中学校部に分かれて情報交換の時間をとっています。本年度は中学校区での情報交換も毎回取り入れています。

この研修会では、今日的な教育課題について、教育委員会等から講師先生を招いた研修も行っています。「教育課程に関する自校及び中学校ブロックの現状の分析と交流」では、中学校ブロックでの地域とともにある学校づくりを交流しあい、学校運営協議会のあり方や教頭としての役割について研修を深めました。その他、生徒指導事案の傾向、ICT関連の環境整備状況、各種調査等についても担当の方からお話を伺い教頭自身が学習する場となっています。

こうした研修だけでなく、各校の教頭の業務や今日的な教育課題等に関わる疑問や困っていることを出し合い情報交換を行っています。情報を共有し各校のそれぞれの取り組みを知る機会となり、自校の取り組みを振り返るとともに今後の方向について改めて考える機会を得ています。特に、新しく教頭職に就かれたり、校種が変わっての異動があったりした先生方にとっ

ては、(私自身もそうであったように)貴重な時間になっていると感じています。内容としては、例えば、PTA組織や活動の改革状況、コロナ禍明けの各校行事の開催状況、学校開放オンライン化について困っていること、等々の情報共有があげられます。

今後も、コロナ後の学校行事のあり方を含め学校を取り巻く環境の変化に伴い、その都度、新たな見直しが求められます。教頭研修会では、引き続き、日常の学校運営で悩んだり困ったりした際、安心して相談できる仲間として、一人ひとりの支えとなれるような魅力ある会として活動を続けていきたいと考えています。研修を進めていくことで専門性を向上させ、さらなる教育の発展、児童生徒の育成につなげていきたいと思ひます。



学び合い 高め合い 支え合う 教頭会 ～信頼される教頭へ～

員弁郡・いなべ市教頭会 いなべ市立三里小学校 小林 宏 人

1. 基本方針

- (1) 変化の激しいこの時代の中で、教育者としての教養と専門性を研ぎ、学校の管理・運営者として必要な能力を高める。
- (2) 「生きる力」と「豊かな人間性」を育成するための教育実践に努める。
- (3) 員弁郡・いなべ市教頭会の活力を高め、組織の発展・強化に努める。

2. 重点課題

学校を取り巻く社会情勢や教育改革の動向を的確に把握し、今日的な教育諸課題の解決に向け、教頭としての役割と対応及び解決方法を研究・検証するとともに、教頭同士・外部との連携を深める。教頭自身が主体的な学びを行い、他者と協働的なつながりが構築できるようにする。

3. 重点課題の設定理由

昨年度は、自分の資質や能力を高めることによって、私たち教頭が自信を持って学校運営に向き合い、さまざまな課題の解決をはかるよう2回の研修会と1回の学習会を設けました。外部講師を招いた研修会、仲間の実践から学ぶ学習会では、わかりやすく講演いただいた講師の先生、主体的に学ぶ仲間によって実りある時間となりました。

今年度も、教頭としてのリーダーシップを発揮するため、そして、自らの資質や能力を高めるために、昨年度の研修形態を継承しながら、「今日的な課題に関する研修会・学習会」「情報交換を密に教頭同士の連携を深める交流会」の2点のバランスを考えて研修を推進していきます。また、校長会や郡・市教育委員会（教育長）

等との関係機関と連携を図ることにより視野を広げたいと考えます。

教頭として、抱える課題や悩みも数多くあります。新たな4名の教頭を迎え、教頭同士の交流や連携を深め、ともに学び合い、高め合い、支え合っていきます。

4. 具体的な研修計画

- ① 「人材育成～コーチング～」…講師を招聘し人材育成に必要な資質や方法について学ぶ
- ② 「防災教育」…市役所防災課より講師を迎え、「防災教育」「危機管理能力の向上」について学ぶ
- ③ 「合理的配慮の必要な子どもへの支援」…講演会によって合理的配慮にもとづく支援方法について学ぶ
- ④ ①～③などの学びをもとにした教頭同士が意見を交わす交流会を通して学びを深める



「つながる」

四日市市小学校教頭会 四日市市立大谷台小学校 中本 旬 子

四日市市の教育ビジョンでは、「夢と志を持ち、未来を創るよっかいちの子ども」をめざす子どもの姿として、予測困難な時代において、変化にしなやかに対応する「生きる力」と「共に生きる力」の育成を目指しています。このビジョ

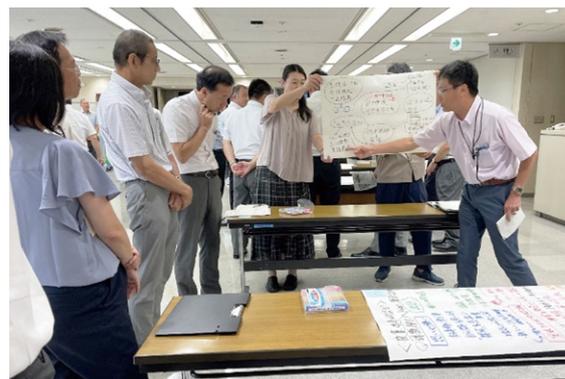
ンに基づいて各校において「学校づくりビジョン」を作成・実施しています。ビジョンの実現に向けて私たち教頭も、社会の変化を敏感にキャッチし、先を見通した教育活動を計画・実践していく必要があります。

四日市市小学校教頭会は、37校39名の会員で構成されている大きな会です。毎月1回四日市市教育長の招集により、研修会を実施しています。基本半日開催ですが、年に2回全日開催と研修の機会に恵まれています。研修会においては、教育委員会からの指示・伝達事項、会務報告、ブロック別研修、研究推進委員会別研修等を行っています。6月には、四日市登校サポートセンターの心理士を招き、「学校を休むということ～児童生徒側から見た景色を中心に～」との演題で講演いただきました。11月には、事務職員からの講演を予定しており、円滑な学校運営のために視野を広げ、新しい視点を持つことを目指し研鑽します。

ブロック別研修では、近隣の学校ごとに5つのブロックに分けて、各ブロックに理事を置き、理事を中心に研修を進めています。ブロックの中で出された課題や意見を役員会で吸い上げ、次の教頭会のテーマを考えています。横の「つながり」を重視し、組織的に活動できるように

理事の果たす役割は大きいです。また、研究推進委員会別研修会では、年間の研究テーマを設定し、研究活動を行っています。各ブロックの代表者で構成されているので、情報収集のためのアンケートをブロックごとに実施したりすることができ、ここでも横の「つながり」の強さが生かされています。

「つながる」を合言葉に、四日市市教頭会は今後さらに横の連携を図り、教頭職に邁進していきたいと思っています。



ウェルビーイングな学校を目指して

四日市市中学校教頭会 四日市市立保々中学校 松 長 則 幸

私たち四日市市中学校教頭会は、22校の教頭で構成されています。月1回定例会を開き、教頭の立場から学校経営について研修するとともに、情勢や動向の把握・確認、学校間の情報交換を行い、各校の学校運営に活かしています。

今年度の定例会の中で、「教頭として困っていること、研修を重ねたいこと」について出し合う機会を持ちました。その中で大きく2つの課題がクローズアップされました。

- ①G I G Aスクール構想の下での校務D X化
- ②学校事務職員との連携・協働



これらの課題を解決していくために、市内の経験豊富な先輩教職員から学ぶ機会を設定することにしました。

①については7月定例会において、中村隆志ICT四日市G I G Aアドバイザーを招いて、「ファーストG I G AからセカンドG I G Aへ～教頭先生に期待～」というテーマでお話いただきました。我々の世代はICTに対して苦手意識を持っている者が多いことや、教頭として日々目まぐるしい職務に追われていることを理由にして、G I G A推進の優先順位を低くしてしまっている学校が多くあります。「まずはやってみること」「積極的に情報を取りに行くこと」「クラウドの有効活用」といったキーワードについてたくさんのヒントをいただきました。G I G Aスクール構想の下での校務D X化を推進していくために教頭としてまずは「個人で・組織で」「短期的に・中長期的に」何をしていけばよいのかを考え、その上で、各校でICT担当とも連携しながら取組を進めていきます。

②については12月定例会において、平山智美調整監を招いて学ぶ機会を設定しています。学

校の教育課題が多様化・複雑化している昨今、学校事務職員の専門性を生かして教職員と連携・協働し、学校の教育課題を解決していくことが求められています。この機会を通して、我々

教頭が学校事務職員の職務についてより理解を深めながら、学校事務職員との連携・協働体制の構築にむけて考えていく予定です。

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて

三重郡教頭会 菰野町立八風中学校 佐藤 雅美

菰野町では平成26年度に八風中学校をコミュニティ・スクール（以下「CS」という）研究指定校とし、平成29年度から町内すべての小中学校でCSを導入しました。菰野町はCSを導入する以前から、「沖見の会」「田光資源と環境を守る会」といった組織の力を借りて教育活動を行っていました。そのため、学校運営協議会をスムーズにスタートさせることができました。

CS導入時には、町内小中学校の教職員と各校の学校運営協議会委員が一堂に会し、すべての学校で足並みが揃うよう、菰野町のCSの在り方について研修会を行いました。研修会では、各校の実践報告や教職員と学校運営協議会委員代表によるパネルディスカッション等を行い、これまでの地域との協働による教育活動の継続と発展、地域と学校とがWin-Winの関係を目指すことを確認しました。

CS導入前は、主に小学生が稲作やタナゴの生育等を地域の方に教わるといった活動でしたが、導入後は、中学生が地域の祭りにボランティアとして参加したり、吹奏楽部が町の行事で演奏をしたりする機会が増えました。また、学校支援活動として、地域の方に図書室の開室や読み聞かせ、授業でのミシンの使い方の支援などにボランティアとして携わっていただいでい

ます。コロナ禍において、一時活動が中断することもありましたが、今では新たな取組として、各地区の実情に応じた地域防災の取組が進められています。

菰野町CSのモデル校であった八風中学校では、一昨年度からSDGsの取組に地域資源を活用しています。菰野町のまちづくり「こもガク実行委員会」の方々にご指導を仰ぎながら、中学生として持続可能なまちづくりについて（菰野町の未来を考え続けるために、菰野を学ぶ）の取組を始めました。昨年度は、3年生が東京日本橋の三重テラスで、2年生がこもガク祭トークイベント会場で、それぞれ自分たちが学習した菰野町の未来について発信しました。

三重郡教頭会の今年度の研究推進のテーマは「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた教頭としての役割についてです。朝日町、川越町、菰野町の3町それぞれの郷土の教育資源を生かし、学校と地域との連携協力を深め、町の未来の担い手となる力の育成を目指しています。教頭会では、各校の実践を報告し合い「地域に根ざした学校づくり」の推進と、それに向けた教頭の役割について研究を進めています。来年度の県教頭会研究大会ではその報告ができればと思っています。



「教頭会だからこそ」～鈴鹿市教頭会のとりくみ～

鈴鹿市教頭会 鈴鹿市立大木中学校 伊藤 佳代子

鈴鹿市教頭会では「教育の専門家として学び続ける教員」を目指し、キャリアステージを問わず教職員の資質向上に取り組んでいる。一人ひとりが教育の専門家としての職責を自覚し遂行する意識を醸成することは、教育活動を行う上での基盤である。そして、基盤を強固にすることが、結果として「教育の質」「働き方」「組織力」を高めることにつながっていく。学校運営に全職員で取り組んでいくためにも、一人ひとりの専門性を高めること。このことがこれからの学校経営においては必要であり、かつ本市教頭会全体の課題であるととらえている。

一人ひとりの専門性を高めることは、令和4年度から3年計画の本市教頭会重点取組課題となっている。まず、課題にかかわる問題意識について小中全40校の教頭にアンケートを実施し、その上で中学校10校に研究対象を絞り、次の3つを重点項目として実践研究を進めてきた。

①「教職員の専門性の意識向上及び醸成」

日々の研修やOJTを通して職員相互の経験や知識の共有を促すため、「教頭から教職員への発信」「教職員からのボトムアップの促進」の取組。

②「教職員の学校運営参画への意欲向上」

すべての教職員が学校運営を意識し参画するために、若手やミドルリーダーが学校全体の運営にかかわる企画・提案に携わる機会を増やす取組。

③「職場の働きやすさの向上」

業務の効率化と環境整備の取組。

令和5年度末には中学校10校での先行取組例を小学校に発信し共有した。今年度は小学校へ横展開し、小学校ならではの取組や課題、困り感等が中学校へも共有されることで、全市的な取組へと発展している。

孤軍奮闘している市内教頭が、多忙な中でも困り感や挑戦・工夫など、とにかく声を上げる機会をつくることでそれらが共有された。学校規模や校種をこえて「支え合い」「わかちあい」「学び合う」ことができるのは、「教頭会だからこそ」である。

今後、どのように取組を検証してさらなる充実と深化を図り、次の教頭へ継承していくか、具体的な方策を探り、見通しを持つことが今年度の課題である。



「地域とともにある学校づくりを進めるために」

亀山市教頭会 亀山市立関中学校 川嶋 英司

亀山市では、令和5年度より複式学級設置校が新たに2校加わり、計4校となった。単級の学年を持つ小規模校もある。子どもたちの数が減少し、県内でも様々な市町で学校の統廃合の動きがある中、亀山市では、「地域の核」として大きな役割を担っている小学校を存続させる道を選択し、取り組んでいる。亀山市小中教頭会では、地域の児童が地域の小学校で学び、確かな学力を身につけることができるように、「地

域に根差した教育活動の展開」をねらいとして定め、重点的に取り組んでいる。

亀山市では、全市で小規模校の教育について研修し、複式の授業を参観して意見を交換するなど、積極的に取り組んでいる。また、遠隔授業やプール等設備の共有のノウハウを蓄積したり、市内小中の音楽会や中学校区単位での人権フォーラム等の行事を行ったりするなど、小規模校教育のメリットを活かしつつ、デメリット

や「中1ギャップ」が消せるよう、小規模校どうしの交流や中学校区内の小学校を結びつける取り組み、教職員間での研修などが進められている。これらの取り組みの中で、各校や地域などの各方面から集まってくる情報を教頭どうしで共有し、意見交換し、各校へ持ち帰って学校運営に活かしている。

教頭の職にあると、学校と地域をつなぐ窓口となって、PTAや学校運営協議会と協力しながら進めていく機会が多い。子どもの声が響く町では、大人も元気で、地域での縦のつながりが強く、地域が活性化している様子がうかがえる。地域の豊かな教育資源を活かし、様々な体験活動が積極的に行われている。子どもたちの現状に合った活動を地域教育資源と結び付け、

活気づけていくのは、我々教頭の大切な役割である。

「子どもたちが輝くことで、地域も輝き活気づく」そんな「地域とともにある学校」を目指し、取り組んでいきたい。



子どもたち一人一人が主人公となる授業づくり～あたたかい学級・なかまの中で～

津市北地区教頭会 津市立千里ヶ丘小学校 鈴木ひとみ

津市がめざす授業改善に、千里ヶ丘小学校も本気で取り組み始めています。もちろん、これまで何もしてこなかったわけではありません。新年度、職員全員で千里ヶ丘小学校の子どもたちの現状をしっかりと見つめ、授業改善は「何のために」必要なのか、この学校に、この子どもたちに必要な授業改善とは何かを考えながらの、新たなスタートでした。

津市河芸町にある本校は、津市の北端にあり、全校児童542人の中規模校です。本校の特徴の1つとして、外国につながる児童が多いことがあげられます。在籍する児童数は24人（つながる国籍は9ヶ国）です。また、特別支援学級に在籍する児童は年々増加し、本年度は29名の児童が在籍しています。一方で、配慮・支援が必要な児童も増加しています。



就学援助の対象となる児童の割合も多く、本校の教育活動を推進していく上で考慮すべき重要な要素となっています。一部の保護者の教育に関する学校依存の度合いも強く、それだけに学校に求められる課題も多様で重くなっており、共にその解決にあたっていかなければならない状況です。

当然のこととして、教室の中で子どもたちの特性や関心・意欲はさまざまで、「多様性」を受け入れた授業づくりが必要となっています。大きな課題は、学ぶ目的を持たずにいる子どもたちがいることです。そして私たちは、そのような子どもたちに、学ぼうとするための手立てや環境をどうつくっていくか、戸惑いや不安を持っていました。

私たちがこれまで大切にしてきたことは、一人一人の子どもをしっかりと見つめ、背景にあるものや背負わされているものをつかみ、思いを知り、ありのままのその子に寄り添うことです。今求められている授業改善が「わからない」が言える仲間づくりを大切にすることなど、人権教育の視点を大切にしていることとつながったとき、この学校にそしてこの子どもたちに必要な授業改善が何か、見えてきたように思います。

1学期は研究授業を行い、指導主事や専門性を持つ講師の方を招き、授業づくりを研修しました。夏季校内研修では、子どもたちについて

の語り合い、授業改善についてさらに学びを深め、「津市架け橋プログラム」をふまえ幼児教育からも様々なことを学びました。その一方で、さまざまな研修会に参加し自己研鑽に励む先生たちの姿がありました。

授業改善は何のためにあるのでしょうか・・・それは、多様な子どもたちが最も長い時間を過ごす授業の中に「居場所」をつくるため・・・そのことを自信をもって実践できる力を、私たちがつけていきたいと思います。

私たちの教頭会～教頭どうしのつながりを通して～

津市中地区教頭会 津市立西が丘小学校 田中俊大

津市中地区教頭会は小学校22校、中学校9校の計31校の教頭で構成されており、年間3回の全体研修会を行っています。研修会では、今日的な課題や津市が推進している事業等について、指導主事や講師の先生を招いて講演をしていただき、見識を深めるとともに、教頭としての役割や取り組み方について話し合っています。また、校種別・校区別のグループ研修を行い、教頭の業務についての悩みや困っていることについて交流しています。特に今年度は昨年度から課題となっている、「教頭自身の働き方改革」を中心に情報交換を行ってきました。今まで自分自身が行ってきたこと、学校として行っていることなどを交流することを通して、自らが当たり前のように時間をかけて行ってきた業務の仕方について見直し、時間の短縮や効率化につなげています。そして、創出した時間を、子どもたちが安心して学ぶことのできる学校づくり、職員が働きやすい職場環境づくり、そして、若手教員の育成等に費やしていきたいと考えています。

また、津市では令和6年度に新しい教育大綱が策定されました。この教育大綱には「1. 子どもたち一人一人が主人公となる教育の推進」「2. 教職員がやりがいを持って働くことがで

きる学校づくり」「3. 子どもたちがより良い学校生活を送るための教育環境整備」「4. 学校、家庭、地域がつながり、子どもたちを育ていく体制づくり」「5. 幼児教育の充実と公立幼稚園の果たすべき役割」の5つの柱が設定されています。その中でも特に「1. 子どもたち一人一人が主人公となる教育の推進」に関わって、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、子どもたち一人一人が主人公となる授業への改善が求められています。今後は、一人一人の子どもが認められ、大切にされる学校・学級づくりを進めるとともに、多様な子どもたちが授業の中で「居場所」を作ることができるように授業改善を進めていく必要があります。そのために、教頭会の中で、それぞれの学校の体制や研修の進め方等について交流を行うことを通して、教頭としてどのようなことができるのかを考えていきたいと思います。

教頭会として、教頭自身の働き方改革を進めながら、それぞれの学校での取り組みを交流し、情報共有を積極的に行うことで教頭間の横のつながりを深め、ともに支え合いながら、様々な課題の解決に向けて取り組みを進めていきたいと考えています。



津市立西が丘小学校

「ともにつながり、高まり合える教頭会をめざして」

津市南地区教頭会 津市立川口小学校 竹花 哲也

津市は、津市全体での教頭会に加え、「北地区」、「中地区」、「南地区」にそれぞれの教頭会があります。津市南地区教頭会は、小学校16校、中学校7校の教頭で構成され、少人数であることを活かし、より互いの距離を縮め、一人ひとりの思いを出し合える場になることを大切にしています。特に新しく教頭になられた先生、新しく南地区に入られた先生にとって、分からないことや不安なことを気軽に相談できる場となるよう工夫しています。今年度、第1回教頭会では、中学校区をベースとする小グループに分かれ、「教頭職の課題について」というテーマでグループ協議を中心に実施しました。教頭は、学校全体を把握し、保護者・地域・児童生徒・教職員・関係機関等との対応や連携において、「要」としての存在を求められています。しかし、教頭は、職場ではいわゆる「少数職種」の一人。困っていること、悩んでいること等、周りに相談できず、一人で抱え込んでしまっているケースも少なくありません。特に、年度初めは、次々とやってくる調査や事務処理に追われながら、学校内外の様々な対応が積み重なり、ゴールのない迷路で、自分を見失いそうになります。それは、教頭を経験した人にしかわからない苦労です。学校規模や地域の特性等によって、抱える課題はさまざまですが、お互いに課題を出し合い、協議する中で、「教頭」としての思いは共有できます。

また、7月に行われた第2回教頭会は、津市教育委員会事務局学校教育課の方にお世話になり、9月調査に向けて、具体的に説明をしていただきました。各校の質問にも丁寧に答えていただき、スムーズに調査を進めることができました。

そして、2月に計画されている第3回教頭会は、南地区の学校の校長先生に、「先輩教頭」として、これまでの経験から、教頭として大切にしてきたこと、教頭に求められているもの、などについてご講演していただく予定です。

このように、南地区では教頭会に参加することで、少しでも「気持ちが軽くなった」「明日も頑張ろう」と前向きに意欲的に仕事に向かうことができればと願い、ともにつながり合い、高まり合える教頭会となるよう取り組んでいます。



教育ビジョン実現に向けて教頭が担っていく役割を充実させるために

松阪市教頭会 松阪市立山室山小学校 山中 伸一

松阪市は、「夢を育み 未来を切り拓く 松阪の人づくり」を教育ビジョンの基本理念に掲げています。この理念の実現に向け、各学校では、学校長によるリーダーシップのもと、学校教育を展開しています。私たち教頭は、教職員、地域、保護者へ、理念の実現に向けて、協働して展開していく要としての役割を担っています。

そこで、松阪市立小中学校教頭会では、研修部が中心となり、教頭の力量を互いに高めてい

くため、研修会を企画、実施しています。日頃の各学校における実践を見つめ直す機会として、また、今後の方向性を確認する機会として、今年度は、2回の研修会を企画しました。1回目は、松阪市教育長による講義、2回目は、次長による講義です。

松阪市においても、不登校、確かな学力、防災等、教育課題が山積しています。そのなかで、教員の働き方改革を推進していかなければなり

ません。学校長が各学校でどこに視点をあて、子ども、地域の実態を踏まえたグランドデザインを描くのか、そこに、教頭として何をしなければいけないのかを考えていくことを大切にするため、教育長、次長から直接お話を伺っています。この研修会は、私たちが、主に、松阪市の教育ビジョンをより深く理解するとともに、松阪市において具体的にどのような学校支援体制が整備されているのかを改めて確かめる機会となっています。

学校単位で、日々生じているさまざまな教育課題を解決することが困難になってきている今日、教頭として、学校内にとどまらず、地域や関係機関といかにチームを形成し学校運営をしていくかが問われる時代になってきたことを強く感じるこの頃です。と同時に、私たちの責務に対し、身の引き締まる思いを強めています。新しく迎え入れる新任教頭のなかまとともに、今後、教頭会におけるネットワークをますます大切に、各校の情報交換を教頭間で密にして、日々実践を積み上げていきたいと考えています。

追伸：

9月2日に予定していました次長による講義は、台風10号の諸対応により、延期となりました。本紙には、当日の研修会の様子を写真撮影し、掲載予定していましたが、撮影することができませんでした。



「松阪市教育ビジョン」表紙

「チーム多気郡小中学校教頭会」として

多気郡教頭会 多気町立津田小学校 尾上佳代子

令和6年、新たな仲間4名を加え、4月30日には定期総会を開催し、「チーム多気郡小中学校教頭会」としての活動をスタートしました。多気郡教頭会の活動方針として、「激動する社会情勢の中で、学校教育の中核として新しい学校教育の創造に努め、校長を補佐して、学校運営の発展向上に努める」と示しています。前例踏襲思考を破りつつ、これまでの学びや経験を最大限に生かして、新たなかたちを創りだしていけたらと考えています。そこで、研究部と企



画部の2部会が、今年度も活動を計画しています。

研究部では、「21世紀を築く学校教育の創造と教頭のあり方を考える」のテーマのもと、昨年度までの研究を継続しながら、①多様化する子どもたち一人ひとりに「個別最適化された学びの保障」を図るとともに「誰一人取り残すことのない教育」を推進する。そのために、事例研究を通し、教頭として、できること・すべきことを考え、学校運営に生かす。②事例研究を通し、「つながりマップ」のブラッシュアップを図る。この2つについて力を注ぎたいと考えています。また、企画部では、「会員の研修の充実に寄与する事業を企画する」をテーマに、今年度も県外研修視察の実施や研究発表会開催に向けて準備を進めていきます。県外の学校を視察する機会は、非常に貴重で自身の学校を見直したり、学校運営に関する新たなアイデアを得たりする機会となります。また、それを研究発表会で伝え合うことは、より多くの学びを獲得することになります。

この2部会は、多気郡教頭会の誇れる活動です。研究部と企画部のそれぞれが多気郡教頭会活動の深化と拡充への道を先導していてくれるのではないかと思います。そのために大切にしたいのは、個の力の発揮とチームとしての協働性です。令和6年3月に策定された「三重県教育ビジョン」には、「(一部省略)一人ひとりが自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人びとと協働しながら、さまざまな社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、『持続可能な社会の創り手』になることをめざすと

いう考え方が重要です。」「(「三重県教育ビジョン」2024.3 p.1)と記されています。「チーム多気郡小中学校教頭会」としても、一人ひとりがもつ魅力を最大限に発揮しながら、仲間と協働し、唯一無二のスタイルを創造し続けていきたいと考えます。そして、10月30日、31日に開催される東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会三重大会についても、一丸となり尽力していきたいと思えます。団結力最強の「チーム多気郡小中学校教頭会」として、三重県公立小中学校教頭会の仲間とつながり、共に取り組んでいけたら幸いです。

「つながっている」実感を大切にすること

伊勢市教頭会 伊勢市立豊浜西小学校 竹 田 圭

伊勢には32の小中学校があります。山間部から海沿いまで、600人を超える教頭2名配置の小学校がある一方、複式学級が2つある50人前後の小規模校もあります。規模や環境の違いはあっても伊勢には誇りうる32の学校、それを支える優秀かつユニークな教頭が34人います。

教頭会の最初のあいさつで「つながりを大切にしましょう」と言いました。ふと思いました。「みんなさ、つながりをな、大事やと思っとるんさ。ただな、日々の忙しさの中、つながることがさ、むずかしいんやよな」(「な」と「さ」を、言葉の間や語尾につけるのが伊勢弁の特長)。そこで、この課題を解決するために2つの手だてを行っています。

○「つながりを大切にする」から、「つながり方を大切にする」へ

「つながり」とは曖昧な言葉です。年間を通して計画的に行う総会や研修会への参加は重要

なつながり方の1つです。しかし、それだけではなく、日々同僚の教頭を傍(はた)に感じ、日常的に、取組や思いを交流したり、スキルアップしたりする場が必要ではないかと思えました。

そこで、本年度は教頭会のClassroomを立ち上げ、いつでも教頭会の資料、研修の還流、日々の取組など発信・閲覧・意見交流が出来るようにしました。これまでもメールやチャットでの支え合いや交流を行ってきましたが、それを強化する意味でのClassroomです。例えば、本年度、高知で行われた全国教頭会に出席された先生が次の日に還流報告や資料を掲載していただき、私たちは自由に閲覧することが出来ました。このように日常的に「学びの場」を通してつながっていることを実感しています。

○仕事への多忙感を多望感へ

「忙しい」(多忙感)と思うこと自体、働くことを楽しめていないのかもしれませんが。それを「今日も一日楽しかった。明日は何しよう」(多望感)に変えていく。これは、私たちの仕事量を減らすだけでは解決しません。必要なのは、達成感・満足感です。具体で言えば、「認められたり、ほめてもらったりすること」が必要です。教頭や教職員は「出来て当たり前」「やって当たり前」と思われがちです。他者から「すごいね」「がんばったね」と認めてもらったり、ほめてもらったりする機会が少なくないですか。そして、ほめる機会が少なくなっていますか。だからこそ教頭や教職員同士でほめまくって、



互いの自尊感情や自己有用感を高めていきたい
と思います。

昔、おばあちゃんに言われました。「働くは
傍(はた)(はた・近くの人)を楽にすることさ」

一人一人がそう思い、関わり合い、助け合い、
認め合うことが、まさに WellBeing ではないで
しょうか。

子どもの成長につなげる教頭会のつながり

度会郡教頭会 大紀町立大紀中学校 福井 幸久

度会郡教頭会は、玉城町、南伊勢町、度会町、
大紀町の4町18小中学校の教頭で構成されてお
り、毎年3回の研修会を行っています。研修課
題は、その時々必要と考えられる「学力向上」
や「働き方改革」などの今日的課題を考え、講
師の先生を招いて学習し、教頭としての資質向
上に努めています。会が開かれる度に、日頃の
困り感を共有したり、各校の取組を交流したり
しています。

それぞれの町にも教頭会が組織され、独自の
取組をすすめています。教育委員会および町防
災課と教頭会が防災教育・町防災の課題につ
いて話し合ったり、事務職員との連携を重視した
共同事務室合同会議で勤務や業務について情報
交換をしたりしています。

度会郡の小中学校では、児童生徒数の減少に
伴い、令和7年度には2小学校が、令和8年度
は2中学校が統合になり、今後さらに統合が計
画されています。統合となった場合、環境の変
化に伴い、子どもに限らず保護者からも、不安
や要望等が出てくることが考えられます。そこ
で、今年度は、「学校における危機管理につ
いて」と題し度会町のスクールロイヤーの飯田真
也様を講師に招き、前期研修会を計画しました。
児童生徒・保護者との関わりの中で、教頭とし
てどのようなスタンスでどのように関わってい
くことが必要なのかを考える機会を設けまし
た。教職員が保護者と対峙するのではなく、と
もに寄り添い理解し合いながら、子どもたちの
成長を支えていける関係を大切にしていきたいと
思

います。

郡教頭会や町教頭会での研修や情報交換で学
んだことを参考にしながら、各教頭が所属校に
おいて工夫した取組をすすめ、教育課題解決の
ために工夫と努力を続け、児童生徒の成長につ
なげたいと考えています。

昨今、記録的な災害が各地で発生したり、宮
崎県の地震後には南海トラフ臨時情報が発表さ
れたりしています。わたしが勤務する大紀中
学校では、防災学習を計画的に行っており、新
型コロナ感染症流行後、休止していた三重大
学の川口淳教授を招いた防災学習も昨年度から
再開しました。昨年度は、地震の起こるメカニ
ズムの学習の後、町防災安全課の協力により、
段ボール製のパーティションの設営体験(避難
所設営体験)をしました。今年度は、避難所運
営の学習を行い、生徒に限らず教職員も災害
時に役立てるよう研修をしていこうと考えて
います。



実感できる働き方改革を進めるために

鳥羽市教頭会 鳥羽市立答志小学校 千草 義輝

鳥羽市教頭会は、小学校7校、中学校4校の
計11校の教頭10人(神島小中学校は教頭1人配

置)で構成されています。鳥羽市におけるほと
んどの小中学校は小規模校で、複式学級のある

小学校は4校となっています。また、鳥羽市の離島には、小学校が3校、中学校が2校あります。このような地理的な条件の違いや統廃合が進んだこと等により、学校によって取組に特徴が見られます。私たち鳥羽市教頭会では、年間9回の研修会を開催し、報告、協議、連絡、情報交換等を行っています。

本年度の重点取組は、「各職場での働き方改革・教頭としての働き方改革を進める」ことです。職場に勤務する教職員が健康で働きやすい状況を創っていくことと、教頭である私たち自身の働き方改革の2つの点について、会員で研修を進めていきます。

私たちはまず、5月と7月の研修会で現状把握を行いました。

「教職員は生き生きと働いていますか？」

「働き方改革を実感できていますか？」

職員室の担任として教頭が感じていることや今までの取組の成果について、小学校部会と中学校部会に分かれて出しました。その後、全体での交流を行うとともに、今後の課題について話し合いました。実施済のことや成果としては、定時退校日や退校週間の実施、年間を通してや学期始め、学期末、定期テスト最終日等の授業カットなどが出されました。また、課題としては、スクールサポートスタッフの効果的

な活用、部活動、不登校児童生徒の保護者への連絡は勤務時間後に多いことなどが出されました。働き方改革については、職員間でじっくり話し合いがされたわけではなく、働き方改革の推進を具体的にどう進めていくかについても分かりにくいことも意見として出されました。

今年度はPDCAのPlan, Do, Checkを行い、来年度には改善点を生かしたActionにつなげていこうと考えています。そして、PDCAサイクルを繰り返し、働き方改革を私たち教職員自身が実感できるように取組を進めていきます。時間がかかる取組ですが、私たちは同じ方向を向いて、教頭会として取組を進めていきたいと考えています。



教頭間のつながりを大切に

志摩市教頭会 志摩市立東海小学校 井上 雅 嗣

私たち志摩市教頭会は、中学校6校、小学校7校で構成される、総数13名の教頭会です。「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」を研究主題とし、年間8回教頭研修会を開催していきます。研修会では、今年度は7月に志摩市役所総務部弁護士を招聘して、今日的な



教育課題や危機管理について講演して頂きました。今後は、県内のフリースクール代表者を招聘して「子どもたちの自己肯定感と不登校支援」についての講演をしていただくことや、「市の人権フォーラムに向けて、教頭としてどのように取組を進めていくか」を話し合う研修会を計画しています。

このような研修の他、全体での報告・協議・連絡や校種別や中学校区別の情報交換を行い、市内教頭間の横のつながりを強化することにも力を入れています。新任教頭の赴任が多かった今年度は、6月教頭会で「教頭の日～私のタイムスケジュール～」と題して、それぞれの学校での教頭業務を出し合い、業務の課題や改善に向けて話し合う会を持ちました。

特に春先の教頭業務は激務です。ましてや新任教頭は…。このような状況でこそ、この教頭

会では、気軽に相談し合える仲間となり、日頃の課題や悩みを共有し、ともに考え合い、一人ひとりが元気を創り出す場となっていける組織でありたいと願って開催しました。各学校で、子どもたちや職員のために精一杯努力している仲間たちの姿に力をもらい、最後は笑顔で会を終えられた教頭研修会であったと思います。

このように、日々の学校運営で悩んだり、調

整等に困ったりした時、教頭会のよき仲間の存在が大きな支えとなっていけるよう、活動を進めています。志摩市の児童生徒が誰ひとり取り残されることなく学び続けていけるよう、そして『魅力ある学校づくり』が出来るよう、これからも一層、私たち教頭会もスクラムを組んでいきたいと思っています。



伊賀市教頭会 伊賀市立西柘植小学校 富田直美

伊賀市教頭会は28人の会員が横のつながりを大切にしながら、年間9回の教頭会研修会を行うなど、活発に活動をしています。9回の研修会の前半は全員で、後半は「教育研究部会」「経営研究部会」「法制研究部会」の3つの部会に分かれて研修を行っています。研修会では、「教育環境整備における教頭の役割について」「学校全体の組織力を向上させるための教頭の役割と関わりについて」「学校における働き方改革の可能性」をテーマに教頭業務の中でわからないことやうまくいった実践、いろんな悩みなどを交流しています。

また、年に1度共同学校事務室とのグループ懇談会も研修会の中に組み入れています。今年度は、共同事務室ができた流れや業務内容をくわしく知るとともに、各仕事内容での教頭と事務職員の協力体制について各学校の取り組みを交流し合う情報交換を行いました。やはりこの中でも、お互いに細やかに声を掛け合うことなど、事務職員さんとのつながりが大事であることが確認され、お互いの業務の効率化や連携につながる取り組みとなっています。11月には校務支援システムが伊賀市で導入されるにあたり、今年度については、事務職員さんと共同の研修会を再び行う予定になっています。

私自身、この伊賀市教頭研修会の中で仕事の

悩みを聞いてもらい助言をもらって元気をいただいたり、他校の実践を聞かせてもらい自校の取り組みの参考にさせてもらったりしたことが多々あります。また、仕事で分からないことがあったとき、気軽に連絡を取れる関係ができて安心にもつながっています。この研修会を機会に、各学校では少数職種である教頭同士、学校の枠をこえて助け合い、支え合うつながりが築かれていると感じています。

コロナ禍で活動が制限された以前とはちがひ、いろんな活動が再開し、新しいことにもどんどん挑戦できるようになった今、学校にはまた新たな課題も出てくるとは思いますが、こうしてできた「つながり」を大切にし、目の前にいる子どもたちとの教育活動につなげていけるよう取り組んでいきたいと思っています。



名張市教頭会 名張市立美旗小学校 山本優子

名張市教頭会は、中学校5校、小学校14校の計19校の教頭で構成されています。

年間7回開催する研修会では、各担当が参加

した会議等の報告・協議・連絡等を行っています。今年度は、新たに配置された教頭マネジメント支援員の活用について共通理解を図り、効

果的な活用で業務負担の軽減に繋げることができました。研修会の後半には毎回、中学校区別での情報交換等を行っていますが、新たに校種別での情報交換の時間も設定し、それぞれの校種で多くの情報を共有することができました。

6月の研修会では、教育長に来ていただき、名張市の教育課題について共有し、理解を深める場を設けました。今年度は、「名張市における教育の現状と課題を踏まえた教頭に望むこと」をテーマに、年々増えてきている若手教員が育つシステムの構築や小学校での教科担任制の導入による授業の質の向上、キャリアパスポートの活用による子どもたちが成長を実感できるキャリア教育の推進、子どもたちが安心して力が発揮できるフィールドづくりなど具体例をもとに話していただきました。

講話の中で、我々教頭に望むことや学校現場にいくつかの示唆を与えてくださったことを各校に持ち帰り、課題と向き合い実践につなげています。また、昨年の12月には、視察研修として枚方市教育委員会を訪問し、枚方市立小中学校における「働き方改革推進プロジェクト」について、その先進的な取組を聞かせていただきました。本年度も視察研修を計画し、研鑽を深

めていきたいと考えています。

私たちは、非常に多岐にわたる業務を日々こなし、次々に起こる新たな課題に対応する中で思い悩むことも多くありますが、市内の教頭がつながり、思いや悩みを包み隠すことなく出し合えることが大きな力となっています。今年度も昨年度と同様に、一人ひとりの「点」をつなげて「線」にし、さらにつながり「面」として名張市全体の教育の質の向上を図りたいと考えています。そして、教頭としてアセスメント力やマネジメント力、コミュニケーション力が身につくよう、教頭会でさまざまな情報を共有して、互いの学びを深める機会にしていきたいと思ひます。



未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくりをめざして

紀北教頭会 紀北町立上里小学校 東 伴 哉

紀北教頭会は、尾鷲市、紀北町の小学校12校、中学校6校から構成されている。人口の減少が進んでいく地域であり、学校の休校や閉校が年々進んできている。

このような現状の中、「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくりをめざして」が、令和6年度紀北教頭会の研修テーマとなっている。各学校においては「特色ある学校づくり」を推進してきている。本校では、今年度から学校運営協議会がスタートすることとなった。その場で話題に上がったことを紹介したい。

① 「地域と子どもをえんむすび」の取組

1点目は、自分たちの地域に広がる「田んぼ」のことであった。地域の方にとっては、幼い頃から目の前には田んぼが広がり、お米作りと共に、生活してきたと言える。年々、高齢化、過疎化も進み、少しずつお米作りに関わる人が減り、児童自身も直接、田んぼと関わ

りなく生活してきており、地域の方も寂しく感じていた。そのような中、地域の方のご厚意で田植えや稲刈りなど、お米作りを経験させていただく機会を得た。

児童は、泥んこの田んぼに入り、田植えの大変さを経験することができた。秋になり、お米の収穫ができた頃、今度は地域の方に収穫したお米を使って「おにぎり」を振る舞いたいと計画している。

この取組を「地域と子どもをえんむすび」と名付け、地域の方とお米作りを通して繋がりを深めていきたいと考えている。これらの体験的な取組は、今後の紀北地域の未来を担う子どもたちにとって有意義であると考えている。

② 「防災フェアー」の取組

2点目は、防災学習である。本校は、海から少し距離があり、地震や津波が起こった時、

地域の避難所となっている。以前は、地震や津波が起こった時、どこかに逃げる避難を第一に考え、計画を立てていた。しかし、色々な地域の災害を目の当たりにしていると、自分たちが逃げるだけの避難訓練だけではいけないと痛感した。地域の方が学校に避難し、自分たちの学校が避難所となることを想定し、どのように防災学習を進めていけばいいのか問われている。今年、「防災フェア」と位置づけ、学校、保護者、地域が連携して防災に関する体験を共にする1日を設けることとなった。起震車体験や地震体験プログラムなどの体験や避難時の食事や避難袋の紹介等の計画もしている。また、児童にもこの話題を投げかけ、子どもたちの視点でどのような準備が必要なのかを考えさせていきたい。

これらの取組を通して、子どもたちが、自分たちが生まれ育ったこの町の良さに気づき、この町の人々の温かさに気づき、災害にも負けない町にしていけるよう、取組を進めていきたいと考えている。



「連携と効率化で未来を拓く」～紀南公立小中学校教頭会の取組み

紀南公立小中学校教頭会 熊野市立木本中学校 仲 森 久

今年度、紀南公立小中学校教頭会では、教育環境の改善するために、いくつかの重点取組を実施しています。

1. 教頭の役割の充実

まずは、教頭の役割をもっと充実させることを目指しています。今年度の紀南教頭研修では、6月3日（月）に紀宝町立矢渕中学校の岩本拓志校長先生を講師に迎え、教頭の役割について学びました。教頭としての大事な役割には、校長をサポートして校務を司ること、そして必要に応じて児童の教育を見守ることが含まれます。岩本校長先生の経験から学ぶことで、教頭としての責任と役割を再認識することができました。

2. 連携の深化

次に、教頭同士の連携を深めることに取り組んでいます。研修では、参加者がグループに分

かれて意見交換や情報共有を行いました。これにより、教頭同士のつながりが深まり、より効果的に仕事を進めることができるようになりました。具体的には、教頭としての業務の振り返りや、業務を効率的に進める方法について話し合い、共通の課題に対する解決策を見つけることができました。

3. 業務の効率化

また、業務の効率化にも力を入れています。教頭の仕事量が依然として多いことが課題であり、これを解決するために新しい方法やツールを導入しています。今年度は、ICTを活用して校内の連絡や報告をオンライン化し、業務の効率化とペーパーレス化を進めている学校も増えています。

4. 教育の質向上

研修では、岩本校長先生の実践的な経験談から多くのことを学びました。具体的な事例を通じて、校務の効率化や教育の質向上に役立つ方法を共有し、教頭会の活動をさらに充実させる必要性を確認しました。また、小学校と中学校それぞれの教育の良さを生かし、組織的な教育と個に応じた細やかな教育を融合させることで、生徒一人ひとりの成長を支援しています。

5. 今後に向けて

今後も引き続き、教頭会としての連携を深め、



業務の効率化と教育の質向上に向けて具体的に取り組んでいきます。研修を通じて得た知識と経験を活かし、持続可能な学校運営を目指していきます。

紀南公立小中学校教頭会として、これからも地域社会との連携を深めながら、教育環境の改善に向けて一歩ずつ前進してまいります。

夏季教頭研修会で学んだこと

三重県公立小中学校教頭会調査部

令和6年度夏季教頭研修会は、昨年度に続き全員参集という形で開催することができました。

第一部は、三重県教育委員会小中学校教育課 谷本博史課長補佐兼班長による講演「県と国の今後の施策を踏まえた所管関係等～三重県教育ビジョンを中心として～」でした。①三重県教育振興ビジョンについて、②GIGAスクール構想第2期を念頭にした端末更新等について、③小中学校教育課の今年度の取組についての3つの内容でお話いただきました。特に、三重県教育ビジョンに関して、子どもたちに育みたい力「自立する力」「共生する力」「創造する力」を常に念頭に置いておくことの大切さを教えていただきました。



そして、今年度の教育施策の特徴は、「いじめ防止に関する基本施策が1つの施策として独立したこと」「自己肯定感を涵養する教育の推進に関する施策を新設し32施策の筆頭に位置づけたこと」であり、これらを強く意識しながら、三重県教育ビジョンのもと日々の教育活動に取り組むことの重要性を感じました。

第二部は、前 津市立育生小学校長、現 津市教育委員会 学校サポーター山口富生先生による「わくわくがあふれる学校を創ろう～特別支援教育の視点を生かしながら～」についての講



演でした。三重県立杉の子養護学校での、重度重複障がい・筋ジストロフィーの子どもたちとの関わり、津市立高茶屋小学校あすなろ分校での、発達障害をはじめ様々な困り感や生きにくさを抱える子どもたちと過ごした中での経験や実践を聞かせていただきました。「子どもの思いに寄り添うこと」「行動には理由がある、それは何かを考えること」「子どもたちが前を向いて生きていけるように支援すること」それぞれの大切さについて教えていただきました。また、学校運営、教職員育成、緊急対応の際に役立つ支援スキルについてのお話では、「相手の思いに立ち、聴くこと」「見通しを示すこと」「視覚支援の大切さ」「褒める・認めることの大切さ」など特別な支援を要する児童生徒との関わり方だけではなく、突発的に起こる問題行動への対応の方法などについても具体的に教えていただきました。そして、一貫して子どもたちとの関わりを楽しんでみえる姿や「楽しむことを忘れてはいけませんよ」という温かいお言葉に、自分自身の働き方を振り返ることができました。

今年度も、多くの方に参加いただき、ともに学び、有意義な時間を過ごすことができ、明日への活力となりました。お二人の先生方、本当にありがとうございました。